

オハエカグラ 尾八重神楽の音楽①

黒木亜美子

The Music of Ohae Kagura ①

Amiko KUROKI

1. はじめに

筆者は、過去に「宮崎市の神楽の音楽シリーズ」^{注1)}として、主に宮崎市内のものを報告してきた。まだ、それらのシリーズが残っているが、^{カドガワ}門川神楽^{注2)}や^{ゴウノハル}郷之原神楽を書いてきた。

だが、「必ず書きます。」と約束をして後回しにしてしまっているものがあつた。

そのうちの 하나가、^{サイト}西都市尾八重神楽である。正直に申し上げると、2年ほど休職していたのと、^{ムラシヨ}徹夜神楽の取材なんてとんでもない、との診断で、しばらく研究活動を休止していた。

それで、過去の資料で、既に^{ニシメラ}村所神楽(西米良系)と^{シロミ}小川神楽、銀鏡神楽(東米良系)は卒業論文として書いているので、同じ米良神楽で東米良系とされていたため、尾八重神楽も同じようなものだろうと後回しにしてしまっていた。

最初に自分で直接取材した1987年に、「囃子の音楽は毎年変わるから毎年来なさい。」と言われたが、にわかには信じられなかった。

その後、本学の佐々木昌代准教授が、やはり神楽を含む民俗芸能について調査されていたので、ご協力をお願いして、取材してこられたビデオをダビングして頂いた。更に『古老の舞』として、甲斐恵氏と中武功氏(故人)が製作されたビデオ(1984)と、『ふるさと文化再興事業』として、尾八重神楽のDVDと解説書を制作されたものを参考に(2002)、それぞれ比べながら「序の序」として本論を書いた。

その結果、筆者の考えていた『東米良系神楽グループ』とは大きく違うため、その報告は順次させていただくことにした。

今回はシリーズその①として報告させていただくが、おそらく今後かなりの年月を要することになるだろう。「囃子が違うから毎年来なさい。」とおっしゃったのはどうやら本当のようだ。(笛が違う?)

2. 尾八重地区について ^{注3)}

^{ハエ}八重、^{オハエ}尾八重と名づけられた地域は各地にあり、山が重なりあうような山奥のことを指す、という。(椎葉村にも尾八重という地名がある。)

ここで言う尾八重神楽は、西都市尾八重のことである。

九州山地中央部、一ツ瀬川の支流尾八重川流域の山間地に位置する。北部には宮野山、オサレ山、地蔵岳、東部には杖木山、大瀬内山など、1,000m級の山岳がそびえ、修験者の霊場とみられる巨石群もあるという。

かつて、黒木丈炊之重満(藤原姓菊地)が部下を率いて日向に入り、当地を押領して「雄八重村」と称した。その後、伊藤祐堯に服している。黒木和泉守5世の時代に、米良弾正の攻撃を受け、米良氏の支配するところになり、米良氏は雄の字を嫌って「尾」の字に改めたという。

戦国期に、天正5年(1578)伊藤義祐・義賢は、いわゆる「豊後落ち」をするが、その途上に尾八重地区を経由したという。

明治4～22年(1872～1890)の村名であるが、はじめ肥後国球磨郡、明治5年(1873)に尾八重谷、岩井谷、椎葉谷、猪窪末八重谷が合併して成立する。明治4年の廃藩置県により球磨県→八代県→美々津県→宮崎県になる。

明治22年以降、はじめ東米良村、明治37年(1962)からは西都市の大字となり、今日に至る。

尾八重神社は、大山祇命、大国主命が祀られている。一旦は、廃藩置県で銀鏡神社シロミに合祀されるが、明治13年(1881)に村民の請願により「尾八重神社」と称号し、村社に列した。

毎年、旧暦八月一日は八朔とし、臼大鼓踊を踊って親睦を深めたという。(現在は踊られていない。)

3. 尾八重神楽の特徴

さて、それでは尾八重神楽の特徴を述べてみよう。まだ全てについてのそれではないが、基本となる舞にみられるものである。

最大の特徴は、山間地の神楽の特徴であると良く言われている「跳ぶ」所作が少なく、座舞が多いことである。

また、「鳥飛び」と言われている所作カラストが何を意味するか、囃子が変わらないのに何故特別視(重要な動き)をしているのだろうか。

舞が、どちらかという「歩く」ように舞われている。

「ライトモチーフ型」^{註4)}が多い囃子が普通であるのに、「清山」の舞にはそれが見られないように思える。

それから、他所の舞にもあるが、この他、尾八重神楽には「袖をまく」という魔を払う所作が目立つのであろうか。

また、意味する所は違うが、宮崎市(平野部)でみられる囃子のパターンと同じものが、かなりしばしば出現するのは何故なのだろう。等々、数々の疑問点が生じる。

全曲を見聞したとは言えないのでまだ早いとは思いますが、ある程度の推察をしてみよう。

座舞が多く、他の山間地の神楽のように跳ぶ動作が少ない～^{註5)}山口保明が「宮崎の神楽」で述べているように、山間部と平野部の芸能の交流が行われたことは間違いない。山間部の「婆さま」と平野部の「田の神」は、共に豊作祈願の舞である。へぐろ(かまどの炭)やこげ飯をつけて回り、しばしば問答をしたり、子ども達にとびつかれたりする(竹カゴを背中にしょっている所が多い)という。『笑い』の神様であるようだ。「笑う」ことは、神様を喜ばせる、ともいわれている。また、

宮崎市近辺には「えびす面」という笑いの面が使われる。“笑は魔を払う”との伝承もある。

次に鳥飛びであるが、英彦山修験道では、一人の修験者が左右に座ったままの姿勢で跳んでいた。(NHKTVより)

つまり、尾八重の「鳥飛び」と本来の「鳥飛(跳)び」とは全く別物で、名称だけが共通している(修験道用語として)ことになる。尾八重の「鳥飛び」は、立って舞いながらツーステップ(?)で軽やかに位置替え(?)しているからである。何故このような所作が必要になるかは、今回は見当もつかないが「平野部の神楽」と「山間部の神楽」云々だけでは説明がつかないものであろう。付け足して言うならば、この動きは非常に美しく、足が地についているのかどうか疑いたくなる。

「清山」を見た限りでは、～の動きには～の太鼓云々というのは感じられない。上^{かみんじ}地^{註6)}と下^{しもんじ}地とはテンポが変り、囃子が変わるのは分かるが、それ以上のことはうかがえない。狩猟儀礼である“シシトギリ”を明方近く、神楽とは別に、川原に降りてシシを解体する(?)演目がある。これは明らかに「狩猟文化圏の神楽」と言えるが、筆者にはむしろ穀霊を招くものと思われた

太鼓のライトモチーフがあるかどうかは分らないが、短い動機(モチーフ)を、紡ぎ車のように滑らかに打っている。他に銅拍子とガク打ち(この場合、太鼓の杵を打っていた)があるが、殆ど太鼓と同じパターンである。

太鼓は張りのある音で、桴は太く、1～2音目は右手でたたいた反動で2拍打つ。また、太鼓の右側だけを打つ。宮崎市近辺の神楽太鼓に比べると、強弱の変化は少ないが、強く張った音で(殆ど強弱はないが、はずむような大きな音)次々と音を紡いでいく。舞手の方も、鈴を規則正しく、手首のスナップをきかせて鳴らす。

袖を巻いたまま片足を出して座し、扇を閉じてそのままの姿勢で低く頭を下げる。この動作の意味も不明であるが、鬼神を畏れあがめる姿勢とも取れる。

同じ囃子のリズムが宮崎県平野部と山間部にあることについては、過去に平野部の神楽と山間部の神楽が影響しあったもの^{註7)}としてきたが、どちらからどのように交ざっていったのかは分らない。しかし、どちらも型は違うが藁蛇を切っている。ところが、ヤマタノオロチとされているが、2匹だけという所が多い。^{註8)}小野重朗は、これを十五夜綱引と結びつけて、農耕文化であるというように位置づけている。このことから考えられるのは、「綱切り」は、平野部から山間部に「ヤマタノオロチの象徴」として伝わった(あるいは逆)が、雌雄つがいを切ることで魔を払い豊作を約束するものとなっていったのではないだろうか。非常に反閉^{註9)}の多い舞いぶりを併せて、どこよりも「悪いものを払って良いものを招く」の考えが強くあらわれている。

これから先は、「宗像教授伝奇考^{註10)}」の著者・星野之宣による考えであるが、“ヒツタイト^{註11)}”という最初に鉄器を作った民族が世界中に移動していった。それは一ツ目の巨人として表わされたり、八又蛇として滅されていく。このことは、また日本における平地民(弥生系 稲作民)と山岳民(縄文系 猟を生業にし、鉄の武器を繰る民)の攻争を示している。それは、時として大蛇とそれに追われる(またはその逆)物語となり、蛇の方が退治されてきた。安珍清姫物語もその一つである。その後の可能性として、これらの一族は同じ地名と同姓を名乗ることが多い、と説いている。また、水神(大蛇または龍)をあがめる民と、山の大蛇をあがめる民との抗争があったであろう、とも述べている。

ここから先は私の全くの推論であるが、宮崎という地は、山の神と田の神(どちらもオロチ)が

様々な変遷を経て、両者が“年寄”の姿で神楽に融和されていったのではないだろうか。尾八重神楽も、また融合された神楽ではないだろうか。

また、修験色の強い神楽である、と言われてきているが、修験者そのものが尾八重の地に居ついたらと考えるとどうであろう。

暴論ついでに、もう一つの可能性も書いておこう。

修験者とは、修行する者として、かつての日本ではフリーパスの存在であったはずである。山で修行する彼らと交った山の民は、様々な技術や情報をもたらせられたとしよう。そのような貴重なものを止められるだろうか。山の民自身がそれらを受けつぎ、また発達させて蝶報員＝忍者となつていったか、そのネットワークを作つていったか、ということが考えられないだろうか。

私がそう考えるのは、まだ取材したものは少ないが、神楽の刀の使われ方が五方鎮守である、とはいえ、本物の戦での使われ方をしていることにある。また、クナイと呼ばれる忍者刀の使い方と似ているようにも思える。

この論を立証するのは難しいであろうし、何より採譜を急がねばならない所が複数ある、ということから、この論の実証をする時間はないので、一応書かせていただく。

サンカ^{註12)}＝修験者（里修験も含む）＝忍者等と考えるのはやはり暴論であろうか。

戦前は真剣であった、というから、修験の修行の一つと考えられよう。

どちらにしても、音楽的に他所と違うことといい、「カラス飛び」のことといい、尾八重神楽には探るべき点が多いようである。

なお、同神楽の「八子舞」にサトイモの親イモを角膳に乗せて舞うが、これはかつて^{註13)}坪井洋文が唱えた“イモ文化圏”を示すものかと考える。

4. 尾八重神楽番付

壺番	神上	二人舞
二番	清山	二人舞
参番	地割	二人舞
四番	幣差	二人舞
五番	花鬼神	二人舞（着面）
六番	大神神楽	二人舞
七番	宿神地舞	二人舞
八番	宿神	一人舞（着面）
九番	鎮守神楽	二人舞
拾番	八幡	一人舞（着面）
拾壺番	八社神楽	八人舞
拾式番	八子舞	二人舞
拾参番	稻荷鬼神	一人舞（着面）
拾四番	四方鬼神 地舞	四人舞

拾五番	四方鬼神	五人舞（着面）
拾六番	獅子舞	三人舞（着面）
拾七番	ぼんぜき	一人舞（着面）
拾八番	<small>かななぎ</small> 神和	一人舞（着面）
拾九番	四人神楽	五人舞
式拾番	一人剣	一人舞
式拾壹番	大將軍	二人舞
式拾貳番	柴荒神	一人舞（着面）
式拾參番	綱地舞	二人舞
式拾肆番	綱荒神	一人舞（着面）
式拾伍番	綱神楽	四人舞
式拾六番	繰下し	二人舞
式拾七番	衣笠荒神	一人舞（着面）
式拾八番	伊勢神楽	一人舞
式拾九番	手力	一人舞（着面）
參拾番	戸開	一人舞（着面）
參拾壹番	お清	二人舞
參拾貳番	百式拾番	十二人舞
參拾參番	<small>まい</small> 舞あげ	一人舞

[楽譜 1]

清山下地

⑧ $\bullet = 112$

笛

打

(太鼓・銅拍子・楽板)

accel.

⑧

笛

打

3

3

$\bullet = 106$ ⑧

笛

打

パターン (A)

(神歌)

サ カ キ バ ハ イツノキカ ウエ ソーメ テ

3

5. 尾八重神楽の音楽について

尾八重神楽には、ライトモチーフ的な「この演目にこの手（囃子のパターン）」という形はあまり現れていないように思える。（「清山」についてだけであるが）

太鼓、楽（太鼓のフチをたたく）、銅拍子の打楽器は、3種とも同じパターンを同時にたたいている。これも、他の米良神楽にはあまり見られないことだ。筆者が見てきた他所の神楽に限ってではあるが、通常は3種の打楽器のどれかが他のものとは違うリズムパターンを持っている。

それに、囃子（太鼓が多い）が「～舞の～の手」というように、舞手に合図として違うパターンに変るのであるが、尾八重の「清山」では、テンポが違っていく（上地と下地^{かみんじ しもんじ}）こと以外は、舞手への合図のようなものはない。

次に、囃子の笛であるが、最も採り易い部分（「清山」の下地）のみ採譜した。

それ以外は、故意なのか偶然なのか判じ難い（毎年来なさい、とはこのことだろうか）上に、五線譜では表現し難い音のずれ（？）があり、今後の記譜法を変える必要が生じてくるかもしれない。

また、この神楽には、神楽ばやし歌と言える、観客が歌い交す歌がある。「清山」は比較的早い時間に舞われるものだが、（通常このような歌交しは、夜半近く神楽が盛り上ってきて歌い出すことが多い。）早速にはやし歌が交され、祭場の舞手も神歌を歌っていた。

神歌と神楽ばやし歌は、律の音階のように聞こえるが、笛と同じように少しずつずれた音が聴ける。それが故意なのか偶然なのかはまだ分らない。

ともあれ、もっと突き進んだ考証が必要であろう。

最後に、尾八重神楽に誘ってくださった甲斐恵氏、故・中竹功氏、資料を提供してくださった本学准教授・佐々木昌代氏、尾八重神楽のDVDをそろえていただいた学園図書館他、保存会の皆様にも心からお礼を申し上げたい。特に故人となられた中武功氏には、執筆が遅くなったことをおわびしたい。



〈尾八重神楽祭場〉



〈清山の舞〉

注

- 1) 宮崎市の神楽の音楽 宮崎女子短期大学紀要第11号～第30号 宮崎市内9ヶ所
- 2) 門川は県北のいわゆる入郷地区、郷之原は県南部日南市北郷町に属する。いずれも山間部のもので漁業が盛んだった特徴を残す神楽と言えよう。
- 3) 「宮崎県地名大辞典」角川書店P. P. 201～P. P. 203
- 4) 『音楽と音楽学』P. P. 619～P. P. 644 松永建 南九州の諸神楽の研究－高千穂、銀鏡、祇川神楽－
- 5) 山口保明「宮崎の神楽～祈りの原質、その伝承と継承」鉦脈社（2000）
- 6) 米良神楽は、前半のゆっくりとした舞を上地かみんじといい、後半の早いテンポを下地しもんじという。
- 7) 注1)と同じ
- 8) 『神楽の竜と綱引の竜』南日本の民族文化「祭りと芸能」小野重朗著作集P. P. 333～P. P. 355
- 9) マジカル・ステップとも言われる。邪気を祓い除くための、元々は陰陽師の作法。
- 10) 星野之宣による劇画。鉄の来た道を解明していく途中で様々な事件とかかわってしまう。
- 11) 古代文明で、初めて騎馬戦を行い、鉄の武器を使ったとされる。現在の中・近東方面に相当するらしい。
- 12) 山間や河原を漂泊していった人々。竹製品（箕など）を作って生計を立てていたという。
- 13) 坪井洋文「イモと日本人」（1982）未来社
- 14) 完全4度のテトラコルドで中間音が1個のみのもの。中間音が下から長2度、上から短3度の音階。刈干切歌などに使われていて、古い音階とされている。

参考文献

- 日高正晴監修「尾八重神楽解説書・神楽唄・問答全集」尾八重神楽保存会 平成14年度（2000）
「古武道の本」Books Esotorica 学研（2002）
「修験道入門」五来重 角川書店（1980）
「図説 忍者と忍術」歴史群像シリーズ特別編集 学研（2007）
「修験道の美術・芸能・文学Ⅰ」五来重 名著出版（2001）

地図…山口保明「宮崎の神楽」より

